近年の研究

社会マネジメント学科　木　本　玲　一

これまで私は、フィールドワークをベースとした調査研究をおこなうことが多かった。しかし近年では、2018年に上梓した『拳の近代』に連なるような歴史社会学的な研究の比重が増してきていた。実際にフィールドに出かけていくことに加え、図書館に行ったり、データベースを利用したりする機会が増えていた。

コロナ禍は、そうした私的な変化があった後の出来事だった。以前のようなフィールド中心の研究スタイルであれば、調査ができずに研究がとん挫してしまったと思う。しかしコロナ禍でも歴史社会学的な研究をすすめることはできたので、その点は幸いであった。

ただ国立国会図書館が入館制限をもうけたのは少し痛手であった。特に原稿の締め切りが迫っているなか、抽選が当たっているかいないかで、参照できる資料が変わってくるというのはなかなか厳しいものがあった。幸い私の抽選は当たったが、外れた人もいただろう。将来的にはデジタル化の拡大に加え、館内限定の資料の範囲を一般公開へ拡大するなどの措置も期待される。

またコロナ禍では、リモート学修・研究を推進するために、大学の情報環境の整備が進んだ。これによりデータベースへの学外からのアクセスなども容易になった。これらは歓迎すべき変化であったと思う。

ただ対面が自明でなくなったぶん、研究費関連の伝票を押印して提出するといった物理ベースの作業のムダが今まで以上に目に付くようになった。いわば日本的なBullshit Jobであるが、コロナ禍を契機としてこうした慣習がなくなることを期待したい。